

は、ゲイ文化は隠れたものではないし、20～25年HIVとともに生きている人にも日常的に接する。薬を飲み続け、副作用に悩まされることはいいことではないが、それでも彼らは日常を楽しんでいた。だから、自分もあまり恐れてはいなかったのだと思う。

ある意味、これまでいつも気にしながらの生活をしてきたため、感染がわかったことで逆にその心配から開放された感もある。健康面ではそんなに心配していない。より心配なのは、パートナーを探すときや、長期的な関係へ与える困難さや複雑さについて。病気を伝える必要があると思っているが、この国では伝えると去っていくだろうし、最初から伝えないで後で言う問題になる。

これまでの性的相手に伝えて検査に行ってもらいたいが、大阪のゲイコミュニティは小さいため、それをすると自分のゲイライフは終わると思い、怖い。誰にもこのことは伝えていない。気持ちを誰かに話したいこともあるが、病気のことを伝えて問題になるよりも、自分一人で問題を抱えるほうがまだいい。

HIVは一般的にとても大変で死の宣告だと思われる。とても恐れられているため、みんな、検査をすること、話をする、陽性であることを伝えることを怖がる。怖くて悪いものだから、コンドームを使いなさいという教育がされているのも影響しているのではないかと思う。事実以上に怖いものとされているのではないか、そんなに怖いものではないのに。

【Kさん】

前月にやばいセックスしてるなというのがあって、そこからネットでHIVを調べて、その前もやばいんちゃうかと思った。今回出なくても再度できるようにと思って検査キットを2個買った。

届いた翌日にやったら、5秒くらいで結果が出た。うわって。感染してると思ってなかったし、体調も悪くなかったんで、びっくりして何

していかわからなくて。保健所とかに行かなあかんのやろなというのはわかってたんですけど、インターネットでとりあえずHIVの症状などを探し出して、けっこう落ち込んでた。

その時に陽性者のサイトを見つけた。いろんな人が書いてて、メールが出せるようになっていたので、メールを何人かに出したんですよ。今日検査をしてこういう結果が出ましたって。2人が丁寧な返事をくれて、ホンマに不安だった時に、まさに神様みたいな感じでホントにありがたかった。とりあえず保健所行こうってことになった。

数日後に保健所に電話をしたら、いっばいって言われた。予約制だった。電話かけるときにだいぶ迷ったんです、自宅で検査したら陽性と出たと言うか言わないか。でも電話予約をする段階で言った。そしたら保健所の人に、うちに来てもらっても結果は一緒やから病院に行ってくださいって言われた。電話するのにも2日がかかったんですよ、実は。だから、えっと思って、どこの病院に行くんですかって聞いたら、やり方が違うんでやっぱり検査をここでしますって。混んでたみたいで、予約は数週間後になった。電話を切るときに、キャンセルする時は必ず連絡下さいって何回も言われた。それがけっこう嫌やったんですよ。保健所でこんな対応なんかだと。

保健所では、受付の人はすごいいい感じの人やった。ちゃっちゃと事務的にこなしてくれはって。検査する前にカウンセラーさんと別室で40分くらいしゃべった。検査で分かると全部話した。検査結果を知るよりも、とりあえず前に進みたかったんで、それを説明したんです。そしたら、この県の拠点病院とか、CD4がこうやったら治療になるとか、説明してくれた。

それから検査をしてしばらく待ったら、やっぱり陽性でしたって。最初の40分の中で、ある程度2人で病院行く日とかも話してたんですよ。その時点では腹をくくってたし、もう3週

間たった頃だったんで。今まで大きな病院なんか行ったことなかったんで、カウンセラーさんが一緒に行ってくれることになった。それはすごく心強くて、ぜひってお願いした。

2週間後、ちゃんとした結果を伝えるって言われてたんで、結果後にその日を決めた。その時にカウンセラーさんが、県の電話相談窓口を教えてくれ、この間なんか不安なことがあればいつでも電話して下さいって。自分でいろいろ調べて電話をしたら、丁寧に対応してくれた。

自分はHIVっていうのを他人に言ったのは、そのカウンセラーが初めてだったんですよ。抵抗はもちろんあったんですけど、それを当たり前のように、気を遣うわけでもないし、それはすごい楽でしたよね。最終的な結果は所長さんから説明されて、初めて会ったのに、あなたはすごい調べて来られてるらしいですね、とてもいいことやって言ってくれた。それを継続しながら、決して死ぬ病気ではないからちゃんとした治療をして、ぱっとみる限りではそんなにひどい状況にはなってへんと思う、だから早めに病院行って下さいって。ただ抵抗があったのは、本名、住所全部書かなあきませんやん、保健所で。抵抗してたんですけど、じゃないと紹介状が書けへん、紹介状なしで病院に行ってもらうことになりましたけどいいですかって言われたんです。

病院では、カウンセラーさんも診察も一緒に入ってくれて、その後は別室で診察後にどうしたらいいかなどすべて教えてくれた。それから毎回来てくれる。病院に一人で行くことになってたら、そんなにすぐには行けてないと思う。地元だから余計に。曜日仕事都合とかを考えて決めた。そんな感じでカウンセラーさんは命綱みたいな感じ。今は当たり前っていったら失礼ですけど、生活の一部みたいなもの。あの人がいてくれなかったら。

やっぱりずっと落ち込んで、しばらく誰とも会いたくない時期があった。出るっていうのが嫌やった。カウンセラーさんが、そろそろ気

分転換に出て行ったらってずっと押してくれてた。その時にSNSに入り、いろんな人に会って、初めてわかった時にメールをくれた人にもそこで会えてうれしかった。そこで会った友達ともかなり仲よくしてる。

保健所で検査できるって知ってた。自己検査したのは、わかった時のショックが軽いと思ったんやと思う。他人から陽性って言われるよりも。どっちも一緒やったんですけどね、結局。でも早くわかる。でもそれはいい悪いありますね。何がいいかはわからんけど。わかった時の相手に対しての防御というか。感染を知ってしまうと、やっぱりセックスできないんですよ。僕それ以来できないんですよ。怖くて。ほんまに、あの気持ちをもう他の人には味あわせたくない。もういいやん、僕だけでっていうくらい衝撃やったんで。

自分の部屋行って、一人でいると気が狂いそうになるんで居間に行って、でもおふくろの顔みと申し訳ないって、ほんでまた部屋行って。もうどこにいたらいいんやって。でもひとつね、この病気になってよかったって美化もしませんけど、よかった部分も確かにあるんですよ。人の優しさ、ほんまに人は一人では生きていけないんだなって、これわかったことなんですよ。あとHIVとわかったことも、ある意味よかったと思ってる。わからんままだったら、今でも知らんまま遊んでたと思うんで、誰かにうつしてた可能性もあるってこと。だからある意味よかった。

人に対して優しくなった。おふくろとかに対しても。だから、全部が全部悪いことばかりではないと思いますよ。これからしんどいこともあるかもわからんけど、僕の場合は自業自得なんですよ。だからそれは覚悟はしてますし、嫌やって言ったらそれまでですしね。やっぱりわかってたんですよ。セーフじゃないやり方だったらうつる可能性があるってのは。でもHIVの人間がこの世の中にこんだけいるっていう認識が甘かった。HIVの人は体にぶつぶつがあ

る、痩せてるとか勝手な思い込みで、この人は大丈夫っていう勝手な判断でしてましたから。甘いっていうか無知すぎる。情報見えてるんだけど、全く見えてなかった。また置いてるわって資料も見えてた。手にとって読むとか一切なかった、なったら怖いってのもあったから。検査会もやってるの知ってたけど、怖くて行けなかった。

知ってからは、この距離でしゃべったらうつるんじゃないか、自分の口つけた箸を鍋に入れて、他の人が食べて大丈夫か、タオルも自分が使ったのをおふくろが洗って大丈夫かとか。わかってるんだけど、もしかしたら僕のHIVがうつるかもしれない。うつしてしまったらどうしょ、そこだけなんですよ。この病気が大変な病気だから。治らないから。お医者さんは糖尿病の患者と思っただけいいと言ってくれるけど、そんなもんじゃないんですよ。だから、そのリスクを負わせたくないし、誰にも負って欲しくない。人間には寿命がありますし、死んでいくのはしゃーないんですけど、HIVになったからこの薬が使えないから寿命が縮まるとかね。HIV自体は寿命全うしたとしても、いろんな制約が出て来てしまう。僕は覚悟してますけど、それは僕だけでいい。

でもまだ一年ですからね、これから薬も飲んでいかなあかんやろうし、どんな生活になるかなるかもわからへんし、とりあえず今はこのまま行こかなっていうのが僕の考え。

以上

地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト

<http://www.chiiki-shien.jp/>

「地域における HIV 陽性者等支援のための研究」では、研究成果を広く公開し、HIV 陽性者やその周囲の人たちの生活や支援の現場へ還元することを目的とし、ウェブサイトを開設した。

A ウェブサイト概要

「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」(<http://www.chiiki-shien.jp/>)では、研究班が実施した調査の結果や、HIV陽性者の支援のためのツール等の成果物を公開している他、過去の研究成果や関連領域の資料を集めた網羅的なリソース集およびリンク集を擁する。各地で開かれる研修やシンポジウムの紹介等タイムリーな情報提供も行うなど、各地域でHIV陽性者の相談業務等に携わる支援者へ向けたポータルサイトであると同時に、HIV陽性者にとって各地域における相談・支援サービスへアクセスしやすくするための情報提供媒体として機能している。

なお、本サイトでは、直接の相談は受け付けていないが、必要に応じて、「リンク」ページにある相談・支援機関の一覧を参照し、コンタクトを取れるようになっている。

以後引き続き、地域におけるHIV陽性者等への支援に役立つリソースの収集および情報のアーカイブ化など、コンテンツの拡充を図っていく。

B コンテンツ一覧

- 当サイトについて
 - ・当サイトの目的
 - ・利用方法について

- リソース

- ・ツール（当研究班で制作した、HIV陽性者等への支援に活用できるツールを掲載）
- ・研究報告書（当研究班の研究成果に関する報告書を掲載）
- ・お役立ち資料（他研究班などによる、HIV陽性者等の支援に役立つさまざまな資料を紹介）

- トピックス

- 運営者について
- サイトマップ
- プライバシーポリシー
- リンク

C 「当サイトの目的」より

HIVの治療技術の進歩により、HIV陽性であることが判明した後、HIV陽性者が医療のなかで過ごす時間は非常に少なくなっています。

そうした状況のなか、これまでに、HIV陽性者の固有の課題についての研究は、医療の分野に限定された内容が多く、日本におけるHIV陽性者の社会生活を明らかにした調査はほとんどありませんでした。

このウェブサイトを運営している「地域におけるHIV陽性者等支援のための研究班」では、日本の陽性者の生活実態を明らかにする調査を

予定しています。

また、それと同時に、地域の支援者のHIV陽性者への対応の実態や、困難さを把握する調査も予定しています。

そのことを通して、支援者を支援するために必要な情報が得られると期待しています。

このウェブサイトの情報を、各地の企業、行政やNPOなどの人材育成の場にご活用ください。

その結果、各地域における相談・支援へのアクセスのしやすさが向上し、そのことが、日本のエイズ対策全体の効果を上げることにつながります。

D 「利用方法について」より

このウェブサイトは、地域でHIV陽性者とその周囲の人たちをサポートしている支援者たちのための情報や資源を集めたポータルサイトです。このウェブサイトのリソースを、各地域での相談・支援活動にお役立てください。



図1. 「地域における HIV 陽性等支援のためのウェブサイト」トップページ



図2. 「トピックス」ページ

厚生労働科学研究費補助金
エイズ対策研究事業
地域における HIV 陽性者等支援のための研究
平成20年度 総括・分担研究報告書

発行日 平成 21 (2009) 年 3 月
発行者 研究代表者：生島 嗣
特定非営利活動法人ふれいす東京 研究事業部
〒 169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-22-46-204
TEL 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835
URL <http://www.chiiki-shien.jp/>

